

MIT発、21世紀のアメリカン・ドリーム

西 口 敏 宏
(一橋大学イノベーション研究センター)
教 授



今、フルブライト研究員として1年間、マサチューセッツ工科大学（MIT）にきている。短期訪問は別として、長期滞在は、1980年代後半に3年間、MIT国際自動車プログラムの専属研究員として勤務以来、四半世紀ぶりだ。

この間、米国もMITも様変わりした。「チェンジ・ザ・ワールド!」を旗頭に、グーグルやフェイスブックなど、ソーシャル・テクノロジーを駆使した新ビジネスが世界を席卷している。ソフトパワー全開の時代だ。

他方、日本は大きく出遅れた。当時キャンパスを闊歩していた日本人留学生も、今やすっかり中国人に置き換わっている。

今回は、この四半世紀の間、破天荒な人生を送り、21世紀型のアメリカン・ドリームを果たしたMIT卒業生、チャールズ・ファーガソン氏を紹介しよう。彼の履歴からも、この間の米国の変化が垣間見える。

チャーリーと呼ばれ、当時すでに30歳を超えていたMIT大学院生の彼は、私と同じE40棟で、別のプロジェクトに取り組んでおり、知人同士だった。彼は日本の半導体産業を研究しており、1988年には『ハーバード・ビジネスレビュー』に単著論文を発表し、話題となっていた。

チャーリーがMIT政治学部最初に提出した博士論文は、十分にアカデミックとは見なされず、再提出後の1989年ようやく受理され、博士号を得た。物事にこだわり、安易に妥協しない強い性格だったこともあり、その後、大学教員としての就職先はついに見つからず、いくつかの期限付き研究職をつないで過ごした。

ところが、1994年に彼は「起業家」に転身、インターネット・ソフトウェア会社ヴァーミア・テクノロジーズ (Vermeer Technologies) を起業し、大成功した。本人は経営に専心し、技術は専門職員に任せた。1996年、今度は同社の「フロントページ」(FrontPage) というウェブサイト・ツールの優れた技術力に注目したマイクロソフトに、会社を1億3300万ドルで売却、大金持ちとなった。

その後、引退して悠々自適の生活も送れたはずだが、彼の人生は違った。訪問的な研究職を転々としながらも、手にした莫大な売却金を元手に、2005年に一転して自ら映画会社、リプレ

ゼンテーショナル・ピクチャーズ (Representational Pictures) を設立。長年の夢だった社会ドキュメンタリー映画を、自ら企画、制作、監督し始めた。50歳を超えての再出発、しかも、この業界ではズブの素人である。

1作目は、イラク戦争後の米占領政策の失敗を描いた『ノー・エンド・イン・サイト』(No End in Sight) で、いきなり2008年のオスカー賞にノミネートされた。

リーマンショック後の経済危機の原因に迫る2作目『インサイド・ジョブ』(Inside Job) では、ついに2010年のオスカー賞 (Academy Award for Best Documentary Feature) を獲得し、ソニー・ピクチャーズ・クラシックスからリリース。翌年、日本でも公開された。

ユーチューブで、彼らしい歯に衣着せぬ授賞式スピーチや、チャーリー・ローズ、ケイティ・クーリックといったアメリカの名司会者のテレビ番組に出演時の、「やったぜ!」といった得意満面の彼の姿を観ることができる。

関係者のインタビューを中心に構成された『インサイド・ジョブ』は、ハリウッド俳優、マット・デイモンのナレーションやヘリコプターからの空撮など、資金を惜しげなく注ぎ込み、迫力ある良質のドキュメンタリーに仕上がっており、評判を呼んだ。

かつて彼の博士論文を審査したあるMIT教授は語る。チャーリーは学者として成功はしなかったが、一転、起業して大富豪となり、さらに転じて、映画の世界では、MITで学んだ政治学の知識や、起業家としての実体験を活かして制作した2本のドキュメンタリー映画で、世界最高の栄誉を手に入れてしまった。これは新鮮な驚きであるとともに、われわれの誇りである。

チャールズ・ファーガソン氏の、こうした3回分の人生を生き、うち2回で大成功した経緯は、それ自体、人を鼓舞するが、そこには単に敗者復活やアメリカン・ドリームといった言葉だけでは済まない、何か大切なものが見え隠れする。彼の背後にある一貫した価値観が、その人生を強く駆動してきたのかもしれない。

つまり、自ら真にやりたいと欲し、世界を変えたいと希求したことを、幾多の困難にもめげず、ついには実現してしまった。しかも、一通りにではなく、その時々状況に合わせて自らの事業を興し、好機、資金、知識を上手く活用し、形式は変化しても、最終的に自らの目標、自己実現を果たしたのである。

しかも、彼の夢はこれで終わらず、その後ケーブル・テレビ局HBOのために、ウィキリークス創業者のドキュメンタリー映画を制作中といわれる。こうした社会インパクトの強い企画ものを追求する姿勢は、「チェンジ・ザ・ワールド!」と叫びつつ、21世紀にかけて、次々と起業し、現実に世界を一変した米国の新世代の起業家たちにも、共通して見られる特徴であろう。

つまり、単なる金儲けに終わらない人間的な魅力と強さが感じられ、まさにチャールズ・ファーガソン氏が批判した、儲けさえすればよいという金融界の人間とは異なる価値観の新世代である。グーグルやアマゾンの起業家にしても、フェイスブックを起業したザッカーバーグにしても、自分たちの技術やビジネスで世界を変え、新たな公共善をもたらすことによって、「世界を一新する」という21世紀型の起業家精神が強く感じられるのである。